

海の向こうに目を向ける

「欧米の脅威に対抗するために、ニッポンは変わらなければならない」。そんな危機感が明治維新へとつながっていく。

薩摩藩は日本の端っこで、南の海に開けている。昔から異国との交流は盛んで、鉄砲やキリスト教が伝来した場所でもある。江戸時代にも琉球を通じた交流があり、海外の情報も入りやすい。同時に、海外への危機意識も高かった。

そんな中、先進的な西洋の科学技術に着目した殿様もいた。第8代藩主の島津重豪である。ちなみに鹿児島市の繁華街「天文館」の名は、島津重豪が設立した天文観測所による。



鹿児島市繁華街の天文館



時標(ときしるべ)
「重豪、薩摩の科学技術の礎を築く」(島津重豪、水間良夫)

熱くたぎる思いが、新しいニッポンの扉を開いた

明治維新は薩摩から

る。欧米に負けない軍艦や武器を作ろうとし、電信実験や産業の開発なども手がけた。

開明的な斉彬は、ペリー来航で揺らぐ幕府からも頼りにされる。幕政改革に尽力し、将軍の跡継ぎ問題などにも関わった。この頃に西郷隆盛も抜擢され、斉彬のもとで活躍した。

幕政改革から倒幕へ

大老に就任した井伊直弼は強引に政治を進め、反対派を大弾圧（安政の大獄）。島津斉彬は率兵上京を計画するが、急死してしまう。その後、西郷隆盛も幕府から追われる身となり、奄美大島に身を隠すことになった。

一方、大老暗殺（桜田門外の変）などもあって、幕府の権威が大きく揺らぎ始める。斉彬の死後の薩摩藩は、弟の島津久光が実権を握っていた。久光は兄の遺志を継ぎ、幕政改革に乗り出す。兵を率いて上京するなど、大きな影響を与えた。

当初は公武合体を目指した薩摩藩だったが、次第に倒幕へと藩論が変わっていく。西郷隆盛・大久保利通・小松帯刀らの働きもあって、薩摩藩が政治の主導権を握るようになった。そして大政奉還、戊辰戦争を経て、ニッポンは新しい国に生まれ変わる。

ニッポンの近代化をリード

島津重豪はやがて藩主となる曾孫をことのほかかわいがり、西洋の知識を教え込んだ。その曾孫こそが、第11代藩主・島津斉彬である。斉彬は藩主になるとすぐに近代化政策を実行した。これは集成館事業と呼ばれるもので、日本初の西洋式工業コンビナートを建設す



360度



反射炉跡(仙巖園内)

西郷隆盛、城山に散る

明治政府に不満を持つ士族も多く、反乱を起こす者もいた。鹿児島でも不平士族が拳兵し、西郷隆盛は盟主に担ぎ上げられた。1877年、西南戦争勃発。士族反乱としては最大規模、そして最後のものとなった。



360度



西南戦争の終局、西郷隆盛が5日間を過ごしたと伝わる西郷隆盛洞窟

